はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.20　al museo

武蔵野の風景 5『江戸名所図会』より

分倍河原・陣街道

北関東から鎌倉へ向かう鎌倉街道上つ道が、広大な武蔵野台地を横断し終わるところが分倍河原(府中市) です。目前に多摩川が流れ、川向こうは多摩丘陵がせまるこの狭い低地は古来交通の要衝でもありました。

その分倍河原を舞台に歴史的な合戦が行われたのは、元弘3(1333)年のこと。鎌倉街道を南下する新田義貞の軍勢と、これを迎えうつ幕府軍が激しく衝突を繰返しました。勝利した新田側は一気に鎌倉をめざします。

分倍河原合戦は鎌倉幕府の滅亡を決定的なものとし、また南北朝動乱の時代の幕開けを告げた点で画期的でしたが、地元の府中にも強い衝撃を与えたに違いありません。合戦の記憶はさまざまな形で後世に伝えられました。鎌倉街道はこのあたりでは「陣街道」とも呼ばれ、近くの「三千人塚」「首塚」「胴塚」「耳塚」などは合戦の戦死者に係る伝承をもっていました。

背後の台地上では、近年いくつかの古墳が確認され、高倉古墳群と呼ばれます。台地の下でも発掘が行われており、合戦以前の開発の歴史もやがて明らかになるかもしれません。　(O)

特別展

展示会案内

海辺の生物と貝

7月19日(日)～8月31日(月)

海は「生命のふるさと」であり、今なお海だけを生活の場にしている生物を含めて、多種多様な生物群を養(やしな)っています。とくに海辺は、地球上でもっとも生物生産量が高く、生物の種類も豊富な場のひとつといわれています。

日本列島は南北に長くその長さは約2,400kmもあり、このため日本の南の海と北の海では、生物の種類や地理的分布もずいぶん違ってきています。貝類を例にみると、暖流（黒潮(くろしお)）の中でも沖縄や小笠原諸島など亜熱帯気候の海に生息する貝類には、タカラガイやイモガイなど色彩の美しい貝がみられ、生物の種類は赤道に近づくにつれ多くなっています。

これに対して、北の海は北海道東北部の海辺のように、一年中強い寒流（親潮(おやしお)）に洗われ、そこにはホタテガイやウバガイ、バイ類など白色から褐色の地味な種類の貝類が多く分布しています。貝やカニ、コンブなど私たちの食生活の貴重な水産資源の生息地にもなっています。

流氷の見える海辺（北海道羅臼港）

海辺の生物は、海流以外にも、潮の干満(かんまん)や塩分濃度の影響を受けるとともに、岩礁(がんしょう)（磯）や砂浜によっても種類が違ってきます。

岩が露出している岩礁の海岸は、潮の干満がもっとも激しい場であり、干潮時は岩礁の中にタイドプール（潮溜(だま)り）がつくられ、複雑な環境をつくっています。ここでは、打ち寄せる荒波や直射日光による乾燥など厳しい環境におかれていますが、生物の餌(えさ)も豊富なことから多くの生物が生息しています。貝類ではアワビやカサガイが岩に貝殻(かいがら)をぴったりとつけ、潮が引いて乾燥した岩にはフジツボ類やカメノテがみられます。

これに対して砂浜は、房総半島の太平洋側のように外洋の波に洗われる所では、環境が単純なこともあり生物の種類が少なく、外洋性のチョウセンハマグリやコタマガイ、ダンベイキサゴなどがみられます。

また、東京湾のような内湾では、外洋水の影響の小さい干潟(ひがた)がつくられています。河口の外側に広がる干潟は、川から供給される泥(どろ)や有機物が多く、水の循環も悪いので酸素不足になりがちです。干潟に生息する生物は、このような環境に適応した貝類やカニ類が多く、二枚貝ではアサリやバカガイ、カガミガイがみられ、巻貝ではムシロガイが多くみられます。

本展では、貝類以外にも海生哺乳(ほにゅう)動物に含まれるトドやアザラシの生態、サンゴやウニ・ヒトデ、カニ類など日本近海の生息分布をテーマに展示します。

南の海とサンゴ（沖縄県慶良間）

関東平野内陸部に位置する東京西部・多摩地域も、かって（約100万年前）広く海におおわれていたことが、地質時代の貝化石から示されています。こうした貝化石やオオムガイなどの「生きている化石」も紹介します。　(M)

考古学入門講座

武蔵国府のはなし　その1

「府中」に古代武蔵国の国府が置かれたことは、皆さんご存じのことでしょう。近年の発掘調査の成果はその姿をリアルに映しだしつつあります。ここでは、その成果を交えながら、国府研究の現状を考えていきたいと思います。

＝国府の成立はいつか＝

まず、武蔵国府がいつ成立したのかを考えてみましょう。とはいっても、武蔵国の成立やその国府設置の時期が当時の文献史料に明記されているわけではありません。これは武蔵国に限ったことではなく全ての国で同じことなのです。とりあえずは、文献史料からその時期を探ってみることにしましょう。

7世紀中葉の「大化の改新」以後、次第に天皇を中心とした中央集権的国家体制の整備が進められます。『日本書紀』の7世紀末頃の記事には、いくつかの国の名が見られるようになりますから、この頃には国の範囲がおおよそ設定されたのでしょう。ちなみに、「武蔵国」は天武13(684)年 の条文に初めて登場します。そして、8世紀初頭には都から派遣される国司という役人の制度ができ、地方支配の体制が確立するのです。したがって、国司が赴任する国府も、7世紀末から8世紀初め頃には成立したと想像できます。

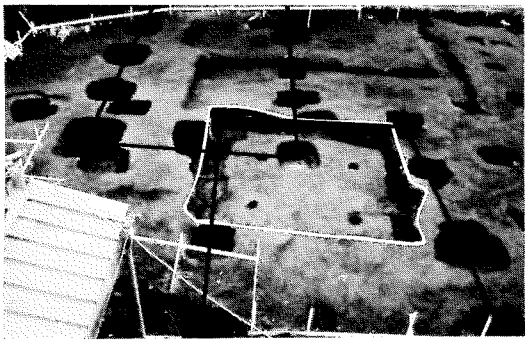
ところが、各地の国府跡の発掘調査では、この時期まで遡る事例はありません。国府の中心施設である政庁の発掘例は、近江国・伯耆国・下野国など僅かですが、いずれも8世紀前葉以後のものなのです。将来、もっと古い国府政庁が見つかる可能性もありますが、現段階では、先程の推定との間には数10年の開きがあることになります。

この間、都から赴任した国司はいったいどこで執務していたのか。当時の地方行政は、国の下にいくつかの郡をおき、地元の有力豪族を役人に任じ、役所を設置するというものでした。この役所は、各地の発掘例によれば7世紀末から8世紀初めには完成していたことが明らかになっています。こうしたことから、その間、国司たちは、国内の拠点的な郡の役所に駐在するか、各郡の役所を巡回することによって任務を果たしていたとする説もあります。

次に、市内の発掘調査の成果から、武蔵国府の成立時期を考えてみましょう。

武蔵国府の政庁の正確な位置や建物の配置は、未だ不明です。しかし、大国魂神社東側の宮町2丁目周辺では、大型の掘立柱建物や礎石建物の跡が見つかり、政庁を中心とした役所の建物が立ち並んでいたと考えられます。残念ながら、その時期は明らかではありませんが、この一帯で見つかる竪穴住居の跡は7世紀末から8世紀初めのものに限られています。さらに、大型の建物はこれらの住居を破壊して造られていますので、おおよそ8世紀前葉にこの一帯に役所群が造られたと推測できます。

また、今までに市内で発見された竪穴住居の多くは8～11世紀代のものですが、その数は7世紀末から徐々に増加し、8世紀前葉にはピークに達することがわかっています。役所の建設には相応の人手が必要ですし、周辺にマチを生むきっかけになりますから、竪穴住居の推移は武蔵国府の設置時期を間接的に示しているといえます。　(F)



大国魂神社境内の調査

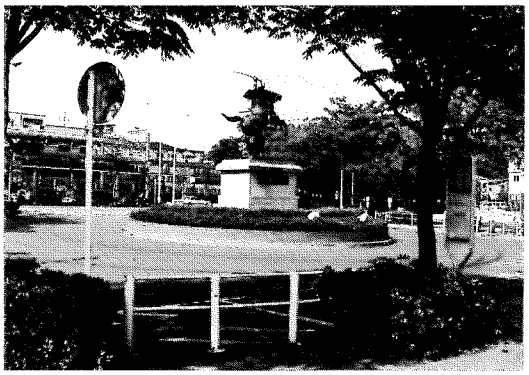
大型の掘立柱建物（黒線）に壊された竪穴住居の跡（白線）

分倍河原合戦の後始末

小野　一之

電車で郷土の森に来てもらうには、京王線の府中駅の1つ隣りの「分倍河原」で降りることになります。JR南武線と交わるこの駅の南側ロータリーでは、鎧兜の武将が馬上で刀を振上げた姿がまず目につきます。近辺（府中市分梅町）は「分倍河原合戦」の古戦場といわれ、近年に造られたこの大きなブロンズ像は新田義貞なのです。

元弘3(1333)年5月8日、上野国新田荘（群馬県新田町）で旗揚げした義貞の軍勢は、一路鎌倉をめざして鎌倉街道を南下。これを迎えうつ幕府軍と激しく衝突したのが、多摩川をひかえたここ分倍河原。5月15日16日のまる2日間にわたる激戦に勝利した義貞軍は、一気に鎌倉に攻入り、幕府滅亡……。歴史に名高い分倍河原合戦ですが、両軍がどこに陣を置き、どんな戦法で、どちらから攻め、どちらが勝って、だれが手柄をたてたかという話は、当時の府中の農民と同じように、さしずめ私の興味の対象ではありません。勢いに乗った義貞が鎌倉に向けて立去った後、分倍河原に残されたのは、荒らされた田畑と、数百数千に及ぶ戦死者の山ではなかったでしょうか。こうした合戦の後始末はどうやってなされたのか。この問題を少し考えてみるのが小稿の目的です。



分倍河原駅前

幕府滅亡直後の鎌倉の様子に触れた、次のような古文書が残されています。

鎌倉は、おひたゝしきさわきにて候つれとも、道場は殊に閑に候つる也。其故は、はけしく来候殿原は、皆合戦の場へ向候つれは、留守跡にて、無別事候。たゝかひの中にも、よせ手・城のうちとも、皆念仏にて候ける。としうちしたりとて、後日に首めさるゝ殿原、これの御房達、まへはまに出て、念仏者には、皆念仏すゝめて往生させ、いくさの以後は、これらを皆見知して、人々念仏の信心、弥々興行、赤なく候。命延候者、又々可申承候。あなかしく、南無阿弥陀仏。（長野県金台寺蔵、『鎌倉遺文』41-32218号）

藤沢道場（遊行寺）の他阿弥陀仏という時宗の僧から、同じく時宗の証阿弥陀仏へ宛てた手紙です。時宗の道場に出入りしていた武士が多く合戦に参加していること、戦死したり処刑されたりする武士に道場の僧が念仏を唱えていたこと、一連の合戦の後は念仏に対する信仰がますます盛んになったことなどが述べられています。また、『太平記』には、赤坂城（大阪府）の攻防戦で武蔵出身の人見四郎入道恩阿という武将に念仏の僧が最後まで付従っていた話（巻6）や、ついに福井で戦死した義貞の骸を時宗の僧が運んだ話（巻20）が出てきます。

時宗は、平安時代末以来流行した念仏を説く宗派のひとつで、鎌倉時代後期に一遍によって開かれ、武士や農民層を中心に広まりつつありました。こうした時宗の僧（時衆）のなかには、相つぐ合戦のなかで、武士に従い、戦死した武士には念仏を与え、あるいは首を敵からもらい受け、埋葬し供養し、さらに遺族に最後の奮闘の様子を伝えたりする役割をもった「陣僧」となる者が出てきました。彼らは自分の身を守る鎧だけで、けっして弓矢を持たなかったともいわれます。（今井雅晴『中世社会と時宗の研究』吉川弘文館1985年など参照）

徳蔵寺元弘３年板碑（拓本）

もうひとつ、徳蔵寺（東村山市）には元弘3年銘の板碑があります。分倍河原とそれに続く村岡（藤沢市）の合戦で戦死した飽間斎藤三郎藤原盛貞ら一族3人の供養のため、遍阿弥陀仏が執筆し、玖阿弥陀仏が建立したと記されています。遍阿弥陀仏と玖阿弥陀仏はその名号から時衆と思われます。また、この板碑がもと建っていた八国山将軍塚のそばには、時宗寺院長久寺（所沢市）があり、元弘年間に久阿弥陀仏が開いた寺と伝えられています。付近は、分倍河原に先立つ久米川合戦が行われた場所でもあります。このことから玖阿弥陀仏らは飽間(秋間)一族の陣僧として、その出身地(群馬県碓氷郡)からともに鎌倉街道を上り、主人の戦死後は激戦のあった場所の近くに道場を構え、供養に勤め、これが後の長久寺になったと想像してみることもできます。

府中にも長福寺という時宗の寺があることが思い出されます。やはり鎌倉街道の近く（宮西町）にあります。境内から出土したという南北朝期から室町時代にかけての多数の板碑が保管されていて、なかには時衆の名号を含んだ板碑も10点近く含まれています。

郷土の森の近くに今も残る「三千人塚」は、分倍河原合戦の戦死者三千人を葬ったという伝承をもっていました。また、分倍河原駅の北側にかつて存在した「首塚」「胴塚」なども合戦に係るものと伝えられてきました。ところが、「三千人塚」は上に建っている板碑の年号から、合戦よりも少し時期が溯ることが明らかで、「首塚」「胴塚」は古墳時代後期の円墳である可能性があります。しかしながら、合戦の戦死者を弔う塚のようなものは、ほかにきっとあったはずです。

合戦が済んでからというもの、付近では来る日も来る日も時衆らの念仏の声がこだましていたのではないでしょうか。もっとも、これで「戦後」がはじまったわけではありませんでした。逆に日本列島の大部分をまきこんだ「南北朝の動乱」の時代の幕開けとなったのです。戦乱がたび重なる間に念仏の信仰も大いに広まっていったことでしょう。

時衆と塚（『一遍聖絵』）

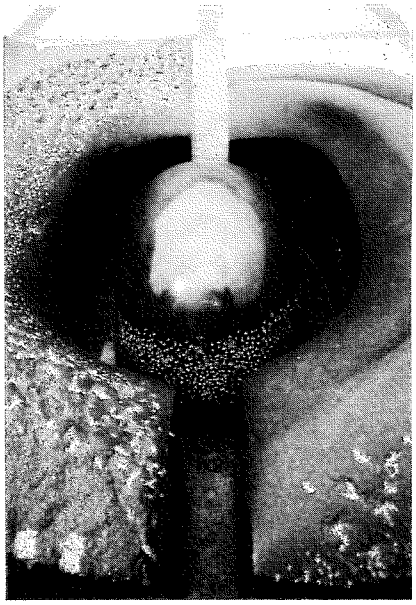
カメラアングル

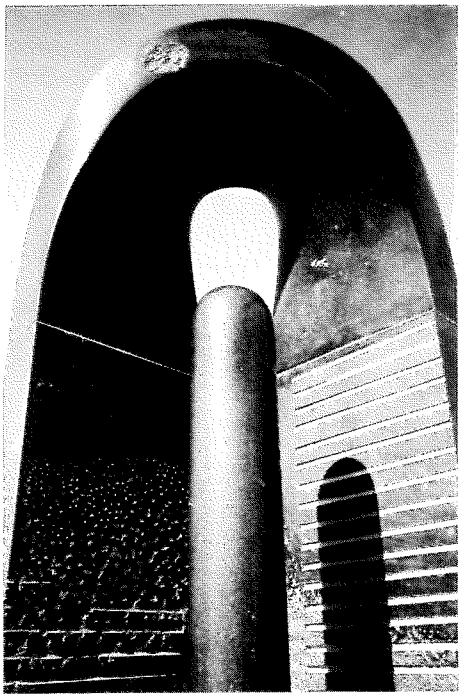
▼大空を仰ぐ…
北村西望作「無限―夏の星空」

▲木々の光を浴びて…
佐藤忠良作「裸のリン」

▲「勤農」を説く…
関　頑亭作「川崎平右衛門翁像」

◀風雪にたえて……
寛文10(1670)年銘 地蔵塔





博物館の象徴として……
速水史朗作 ▲「蔵」 ▶「祖」
（他に「魂」）

［平成３年度の利用状況］

（H3.4.1～H4.3.31） 開園日数307日

区分		有料 一般	有料 団体	減免	合計
入園者	大人	137,170 人	11,802 人	4,540 人	153,512 人
	子供	47,486	22,794	1,822	72,102
	小計	184,656	34,596	6,362	225,614
博物館入館者	大人	33,586	7,338	2,161	43,085
	子供	15,253	12,736	154	28,143
	小計	48,839	20,074	2,315	71,228
プラネタリウム観覧者	大人	54,998	4,688	793	60,479
	子供	30,482	18,769	943	50,194
	小計	85,480	23,457	1,736	110,673
合計		318,975	78,127	10,413	407,515

[平成３年度 寄贈・寄託資料一覧表]

■寄贈資料

	寄贈者	資料名	分類	数量	備考
1	野尻和子	箱枕	民俗	1	
2	沼聖	棹秤 他	民俗	2	
3	矢島中	馬鈴 他	民俗	2	
		大日本交通全図 他	歴史	7	
4	相馬尚教	戦時債券	民俗	6	
5	平田喜好	踏み車 他	民俗	22	
6	伊藤義蔵	蚊帳	民俗	1	
7	田口いち	湯タンポ 他	民俗	3	
8	神明社氏子会	提灯	民俗	7	染殿神社御祭礼
9	吉田ぬい	鉄瓶	民俗	1	
10	村越金森	消防組辞令	民俗	1	
11	小川良助	一斗枡・斗掻き棒	民俗	2	
12	岩崎ヨシ子	写真葉書	民俗	1	府中小学校ノ全景
13	高橋一夫	柱時計	民俗	1	
14	相澤東	車長持	民俗	1	
15	笠井義博	尿壺	民俗	1	
16	飯島長平	家庭用品購入通帳 他	民俗	4	
17	木島弘	三巴文軒丸瓦	考古	1	江戸時代

■寄託資料

	寄託者	資料名	分類	数量	備考
1	川崎昌美	書画掛軸 他	美術	101	
		文書類	歴史	1括	
2	小川良助	関八州與地路程全図	歴史	1	
3	青木明彦	富本憲吉作品	美術	13	

＝最近の発掘調査から＝

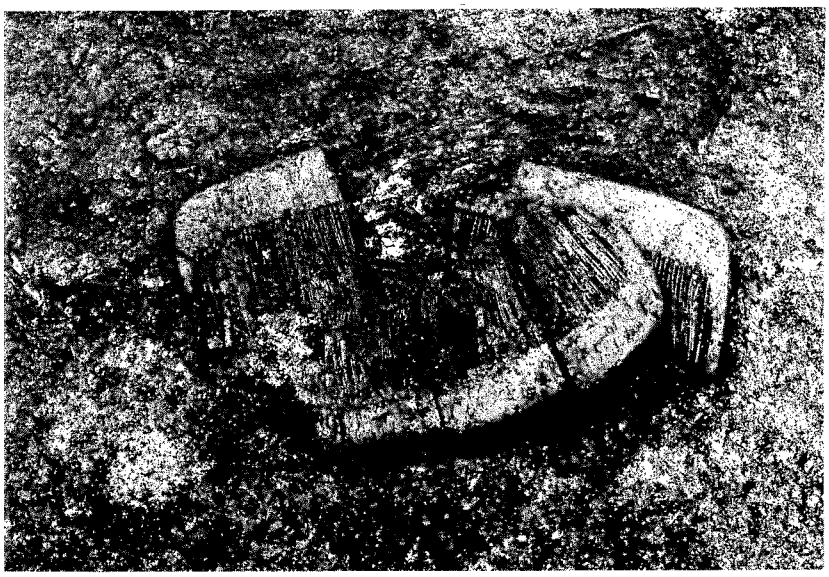
今回お話する発掘調査は、国分寺市ざかい、すなわち都立府中病院南側に広がる、奈良・平安時代の集落遺跡に係る発掘調査です。

この集落遺跡は、武蔵国分僧・尼寺を中心に広がるもので、国分僧・尼寺の創建や、その後の維持管理にたずさわった人々の生活する場であったと考えられています。発掘現場はこの集落遺跡のなかの、武蔵国分尼寺跡の南西約300mにあります。南側では東京都によって「府中都市計画道路3・3・2号線地区」（通称「東八道路」）の府中街道以西の発掘調査が続けられており、府中市遺跡調査会でも周辺では、幅12mを計る古代道路跡が検出されている「東芝エンジニアリング地区」や、竪穴住居跡等が検出されている「白鳥田子寮・信愛寮地区」等々の発掘調査が行われています。

そのようななか、今回の発掘現場は30坪以下とこれらのなかでも、小規模な部類の発掘現場でしたが、竪穴住居跡が3軒も検出され、大きな成果があげられました。特にそのなかでも最大の成果といえるのは、うち1軒の竪穴住居跡が火災にあっており、焼け落ちた上屋の材の下から、櫛（くし）が2個重なって床に置かれたような状態で見つかったことです。周辺では柱とは考えにくい板状の炭化（たんか）した材も検出されており、櫛があまり焼けていなかったことと併せ、あるいは木箱に入っていた可能性も考えられます。もっとも櫛自身が板状の材の上にのった状態で出土したわけでなく、このことについては想像の域を脱し切りません。

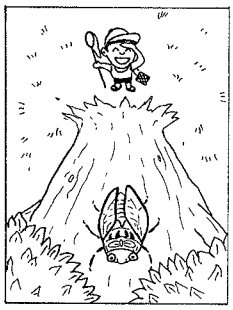
櫛の材質については明らかとなっていませんが、形状は現在のつげの櫛ときわめて類似しており、非常に丁寧に作られています。はたして、このようなものを竪穴住居に住む住人が通常的に所有していたものか疑問が持たれます。もしいずれからか賜ったものとしても、近隣に存在するのは国分尼寺と僧寺です。ものが櫛だけに2つの施設とは、かけ離れた感があり、今後櫛の出土した竪穴住居跡の性格について、詳しい検討が必要であろうと考えています。

(武蔵台・加藤ビル地区の調査から　荒井)



あれこれ　夏の詩人・セミ

夏。ジリジリと強い日射が絶え間なく地上に降りそそぎ、あたかも巨大な温室に閉じ込められたかのような錯覚に陥ります。私達にとっては多少過ごしにくい季節も、野生の動植物には活動盛んなひとときです。なかでも梅雨が明けると緑の木陰で鳴き出すセミの声は、まさに夏の躍動を感じさせるにふさわしいものでしょう。夏の風物詩でもあるこのセミしぐれは、真夏の太陽の下でアブラゼミのひときわ大きな鳴き声を聞けばより暑さが増し、逆に夕方涼し気にヒグラシが鳴けば何とも爽やかに感じられます。



国内に生息するセミは30種ほどで、全世界には約1500種を数えます。セミは暖かい地方の昆虫で、東南アジアには種類も多いのですが、北方にはほとんど生息しません。生息の北限は北緯55度あたりまでで、高緯度地方に生息するものとしては、イギリスのニューフォレストと北サハリンにそれぞれ1種ずつが確認されています。北欧の大部分の国の人は、従ってセミしぐれの風情を楽しむということはありません。イギリスでは日本のチッチゼミに相当する1種のみが生息し、貴重種ゆえこの昆虫を詩と詩人の象徴だとする伝説的な考えが浸透しているほどです。この歌う昆虫達は、雄に限り鳴くことができます。雄の腹は中が空洞になっている部分があるため、ここに声を響かせて音を出しますが、雌にその機能は備わっていません。代わりに多くの卵がつまっているのです。

セミは大変長い幼虫時代を土の中で過ごします。2年から5年ぐらいの期間を幼虫の形で経て、夏の夜地上に出てきて成虫となります。さなぎの時期がないので不完全変態と呼ばれています。そしてようやく外界に出て鳴き始める成虫は、悲しいことにわずか2週間ほどでその一生を終えてしまうのです。郷土の森はもちろん関東から関西にかけてごく普通にみられるセミは4月頃から鳴き始めるハルゼミを皮切りにニイニイゼミ、ヒグラシ、アブラゼミ、ミンミンゼミと続いてきます。8月上旬からツクツクボウシも加わるといよいよ夏本番の合唱となりますが、これら夏の主役達が精一杯の声で歌い続けるのは、ようやく地上に出られた喜び半分と、いくばくもない己れの一生への嘆きなのかもしれません。　(N)

インフォメーション

郷土の森の 新 刊 紹 介

■郷土の森を撮る―畑亮夫写真から―
写真家畑亮夫氏がとらえた四季折々の郷土の森の美しい風景。　A4・1,800円

■府中市郷土の森博物館―町家移築復原三題―
町家・店蔵の復原建物を建築史的概説と畑亮夫氏の写真で紹介。　A4・1,600円

■旧田中家住宅調査報告書
甲州街道府中宿の大店・田中家の歴史とその住宅復原の記録。　A4・4,900円

■六所宮社家家集（府中市郷土資料集14 ）
幕末期の文化人、六所宮猿渡盛章・容盛、渡辺桜男の和歌集の翻刻。　A5・2,400円

■府中市郷土の森紀要　第5号
ゴミグモ属、上総層群貝化石、緑釉三彩の復元実験、柳田国男の旅、聖徳太子伝承、干菓扱き、中世定光寺の個別論文。B5・1,600円

あるむぜお　第20号

al museo　イタリア語
"博物館で" "博物館にて" の意

発行日　1992年6月20日
発行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921